

# 今こそ受精卵移植！

## ④移植適期 ～体内卵と体外卵の違い～

県立総合技術研究所畜産技術センター 育種繁殖研究部 福本豊氏

### 〔前回の概要と今回の結論〕

先月号では、受精卵に「体内受精卵」と「体外受精卵」の2種類があることを紹介しました。それは受精卵の生産方法や生産効率についての話でした。今月は実際に移植する時に注意してほしい、「体内卵」と「体外卵」の違いを紹介していきます。覚えて欲しいのは2点だけです！

## ～体内卵は7日目 体外卵は8日目～ 発情は0日目として数える！

### 〔移植に適した時期～受精卵の成長具合から考える～〕

受精卵移植でうまく受胎させるには「受精卵」と「移植を受ける牛」を良い条件に揃えることです。せっかく移植しても「受精卵ごとに適した時期」に移植をしないと受胎率が下がります(図1)。

これは何故でしょうか？

図2には凍結に使われる「受精卵」の写真を載せています。体外卵は体内卵に比べて大きく見えませんか？これは1日分長く成長させてから凍結しているからです。つまり体内卵は受精してから7日目、体外卵は8日目の状態で凍結されているんです。

次に、「移植を受ける牛」についてですが、移植日は発情日(本来人工受精をする日)を0日目として決定します。牛の状態としては発情から7日目の子宮は7日目の受精卵を、8日目の子宮は8日目の受精卵を受け取る用意をしています。そのため体内卵(7日目の卵)を移植するには発情日から数えて7日目、体外卵(8日目の卵)は8日目に移植する必要があります。発情日が月曜日の場合「体内卵」を使うなら翌週月曜日、「体外卵」なら翌週火曜日とも言い換えられますね。

ここまで色々と理論的な説明をしてきました。でも一番言いたかったことは最初に書いた通り「発情日を0として体内卵は7日目、体外卵は8日目に使う」ということです。移植適期を正しく判断して損をしない受精卵移植を目指しましょう。

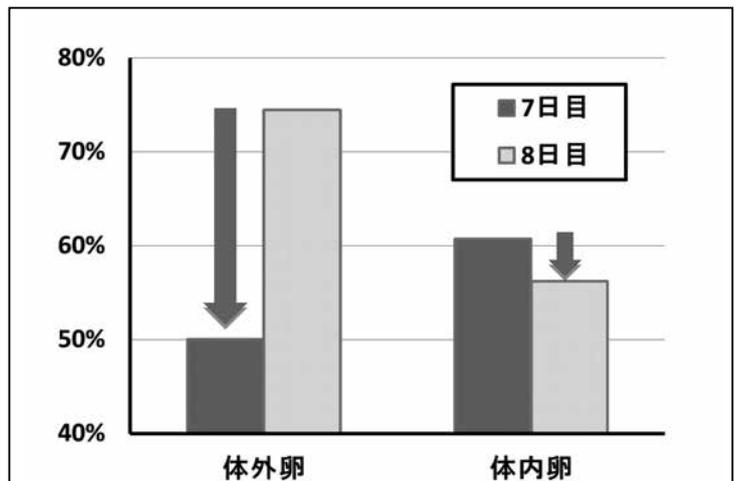


図1. 受精卵別の受胎率(移植日別)

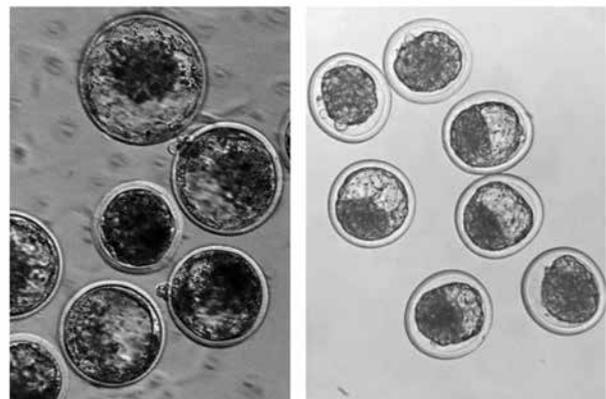


図2. 体外卵(左)と体内卵(右)